
MY SWEET DARLIN' **孤独の生まれたところ**

来生尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MY SWEET DARLIN・孤独の生まれたところ

【Nコード】

N3558S

【作者名】

来生尚

【あらすじ】

「MY SWEET DARLIN」第5話：心の中に誰も踏み込ませない。そんな決意を胸にしたサーシャ。

報告と依頼があつて訪れたという祭宮カイ・ウィズラールとの間に亀裂が入る。

崩れかけた彼女の心を支えたのは水竜レツだった。

ずっと夢を見てた。

いつか水竜の神殿からお迎えがきて、水竜の巫女になるって。
偶然王子様に出会って、恋に落ちるって。

吟遊詩人の話を目を輝かせて聞いていた子供の頃、そんな夢を見ていた。

小さくて薄汚れた、パンの焼ける匂いが充満する家。
決して家が嫌いだったわけじゃないけれど、もっと広くてきれいなところに住んで、フカフカのベッドで寝てみたかった。

キレイなドレスが着たかった。
見目麗しい王子様と、誰もがうらやむような恋に落ちて、村を出る。

それか水竜の神殿からお迎えが来て村を出る。
そんな空想にドキドキして眠れない夜を過ごしたこともあった。
もしかしたら、とにかく村を出たいと思っていたのかもしれない。

けれど、そんなことはありえなくて、一生村の中で暮らすんだという現実を知る事は、比較的早い時期に訪れた。
誰かが教えてくれたわけじゃないけれど、そんなことはありえないんだって、悟ったという気が付いたというか。
現実には子供心から夢を奪い、諦めを植えつけた。

私はきつと村の誰かが、近くの村の誰かと結婚して、ずっとパンを焼き続けるんだろう。

親友の力はお父さんの農園を継いで、ずっとブドウを作り続けるんだろう。

そんな風になんとも自分たちの未来が見えてきて、現実には夢のように甘くないことを教えてくれた。

夢だった、はずだった。

本当に私のところに水竜の神殿からお迎えがくるなんて、そのときは本当に信じられなかった。

だって、私は特別な何かを持っていない。

ただのパン屋の娘なんだから。

おとぎ話のような奇跡が訪れるなんて無いと思っていた。

だから、信じられなかった。

けれど心の中では浮かれていた。

その浮かれた気持ちは、より厳しい現実によって打ち砕かれたけれど。

一度目は水竜の神殿に巫女としてきた時。

当時の巫女様で今の神官長様に始めてお会いした時、私はただの田舎娘で、とても巫女にはふさわしく無いと思った。

巫女になるなんて不可能だと。

それでも何とか巫女をやってきたけれど、それさえも否定された。

二度目は数ヶ月前。

私は私なりに精一杯やってきたつもりだった。

ちゃんと水竜の言葉をご神託として伝えているのだから。

なのに神官長様も祭宮カイウィズラール殿下も、私の言葉を信じてくれなかった。

結局、私はニセモノの巫女だと思われるんだ。

だからどんなに頑張って巫女らしく振舞っても、形だけ巫女として扱われているだけ。

本当に巫女として必要としてくれるのは、水竜、その人しかいない。

だから、私はレッツしか信じない。

レッツにしか心を開かない。

私はもう、他の人に認めてもらおうとは思わない。

奥殿でレッツという時以外は、そつなく巫女をこなせばいい。だって、どんなに頑張っても結果は同じなのだから。

誰も、私の心には踏み込ませたりはしない。

最近やつと雪が解け始め、木々に緑が点るようになった。
まるでそれを待っていたかのように、祭宮のウィズが神殿にやつてくるらしい。

シレルに訪問の理由を聞いてみたけれど、特に聞いていないとのことだった。

面倒くさい。

無意識に溜息が出てしまう。

ウィズの顔を思い出しただけで、憂鬱になる。

それに、やつと奥殿へ頻繁に行けるようになって、レッと過ごす時間が増えたのに邪魔された気分。

どうせ神官長様に会いに来るついでにご挨拶くらいってところなんだろうから、余計に腹立たしい。

でも形ばかりとはいえ巫女なんだから、王宮からの使者である祭宮に会わないというわけにはいかない。

巫女の正装をして、女官たちに髪や化粧を整えてもらって、沢山の宝飾物を付けてもらう。

ただ会うだけで、どれだけの時間と労力が掛かるか。

その分、レッに会えなくなる。

本っ当に大した用事じゃなかったら、むかつくどころの話じゃない。

どうしてくれようか？

裾を翻しながら神官長様の執務室へ行く間に、だんだん腹が立ってきた。

さっさと挨拶して退室しよう。

本当は会いたくないくらいなんだから。

いつものように神官長様の執務室の前まで来ると、つい足が止ま

っ
てしまう。

中の二人の様子に耳をそばだててしまうから。
聞こえてくる笑い声はいつもと変わらない。

そしていつもどおり、ノックをすると笑い声は止まるんだろう。
ノックをすると、思った通り笑い声が止まった。

ほらね。

ふっと、思わず口元が歪む。あまりにも予定通りであからさまで。
わかりやすすぎて。

頭をふり、巫女の仮面を被りなおして扉をゆっくり開く。

一步部屋に足を踏み入れると、神官長様の表情から笑みが消えて
いき、視線が逸らされた。

あの雪の日以来、ずっとこうやって目を逸らされてしまう。

毎日のことだからもう慣れてしまった。

だから、気付かないフリをして、神官長様から目をウィズに移す。
対照的に微笑みを湛えながらウィズが立ち上がる。

- - 嘘くさい笑顔。

レツの声が頭の中に響いて思わず笑いそうになったけれど、平静
を保って「巫女の笑顔」を作り直す。

「お久しぶりでございます、巫女様」

「こんにちは、祭宮様。おかわりなく元気そうで何よりです」

神官長様とウィズの座っていたソファの前まで来て、決められた
とおりの、より優雅に見えるように挨拶する。

それも、いつもどおり。

「どうぞお掛け下さい」

ウィズの手が、ずっと空いているソファを指し示す。

「失礼致します。祭宮様もどうぞお掛けくださいませ」

「ありがとうございます。失礼致します」

ちょうど、三角形の三つの角に三人が座るような形になる。

ウィズは相変わらずニコニコしている。

「巫女様はその後おかわりありませんでしたか？」

「はい。お気に掛けて下さってありがとうございます」

続きを遮るように、神官長様が立ち上がる。

今までこんな事無かったのに。

神官長様の顔を仰ぎ見るけれど、横顔からは何を考えているのか全くわからない。

決して視線を合わせようとはせず、まっすぐウィズの方を見ているから。

「わたくし、ちょっと失礼致しますわね」

「ええ、わかりました。お戻りになるのでしょうか」

口では快諾しているような返事だけれど、ウィズは戸惑うような顔をしている。

「ええ。先程の件を調べて参りますわ」

ウィズの顔に笑みが戻る。

「お手数をお掛けして申し訳ありません」

「いいえ。では失礼致します」

そついうと衣を翻し、神官長様は背を向ける。

結局一言も口を利かずじまい。

今日のように話さざるをえないような状況ならと思っていたけれど、やっぱり顔を見ることも話すことも拒絶されている。

私、何かしたのかな。

あの雪の日以来ずっと避けられている。

避けられているんだろっていうのは感じていたけれど、こう

まで徹底されると、嫌われているとしか思えない。

元々好かれていないことは、わかっていたけれど。

神官長様の後姿に目を向けるけれど、決して振り返る事はない。

何がいけないんだろうなあ。

巫女として信頼するに足りないからかな。

それにしたって、それが原因ならもつと前からだろうし。

巫女を交代した時から、そういう態度をとってもおかしくないのに。

ここ数ヶ月の事だから、さっぱり理由がわからない。

気にしたってしょうがないって割り切るしか、うまく心の平静は保てなそう。

「巫女様？」

ウィズに声を掛けられて、慌てて笑顔を作りなおす。

「こちらはようやく雪が解けてまいりましたが、王都はもう花が咲き始めているのでしょうか」

当たり障りのない会話を、少し無理やり持ってくる。

何を考えていたのか話したくもないし、聞かれたくもなかったから。

心の隙を見せたら、あつという間に入り込まれてしまう。祭宮力イ・ウィズラールという人はそういう人だから。

私の中にある弱い部分を知っているから、ウィズはいつまでもずっと私のことを巫女として認めてくれないのかもしれない。

だから、巫女だつて認めさせるためにも、私は絶対ウィズに本心を見せちゃいけない。

完璧な水竜の巫女でなくてはいけない。

昔の村娘のサーシャを彷彿とさせるような事があつたらいけない。

「王都はもう随分春めいてきております。一度巫女様にもお見せしたいものです。王都の春は花々が咲き乱れ、とても華やいで美しいですから」

何事もなかったかのように、ウィズが微笑む。

完璧な笑顔。

作り物みたいな、決して本心を見せない、それでいて親しみさえ感じるような表情に、心の中でそっと毒づいた。

相変わらず嘘くさい。

言っている事も、どうせ本心じゃない。ご挨拶に決まっている。

どこまで本気なんだかわからない。

本心を知ろうとは思わない。

ただ祭宮のウィズがしたように完璧な笑顔をするだけ。

「王都はこちらに比べて暖かいですね。機会があれば一度は見てみたいですね。華やいだ、春の王都を」

「では、いつかお連れ致しますよう。王都へ」

にっこりと微笑んだウィズに同じような笑みを返す。

「そうですね。機会があればぜひ」

決してそんな時はこない。

私が巫女じゃなければ、こうやって話すこともない人なのだから。巫女でなくなった瞬間から「祭宮」にとって、私は全く価値のない人間になる。

巫女でいる間、私はこの神殿から出ることはない。

だから、決して果たされる事のない約束ってこと。

所詮は上辺だけの会話。

そう思ったら、心の中から寂しさが湧き上がってくる。

どれだけの会話を交わそうとも、私とウィズの間には決して埋まる事のない大きな溝がある。

立場という名の境界線。

それは生まれたときから決められていて、一生覆る事はない。

当たり前のことなのに、何で胸が痛むんだろう。
考えたらいけない。

考えたらきつとまたうまく巫女を演じられなくなってしまう。

自然と手に力が入り、気付いたら服の裾を握っている。

こんなこと、巫女がするようなことじゃない。

うまく表情を作れなくてウィズから目を逸らし、テーブルの上に置かれたカップに目を移すと、カップの中のお茶は冷め切っているように見える。

「お茶を入れ直しますね」

部屋の隅に控えているシレルに目配せすると、心得た様子で一礼し執務室を出る。

パタンとドアが閉まる音がしてシレルの気配が消えると、部屋の中の空気が重苦しくて息苦しい感じがしてくる。

何かを話さなきゃいけないと思っても、何を話せばいいのかわからない。

神官長様みたいに、上手に綺麗に丁寧に話したりなんて出来ないし、気の利いた季節の挨拶なんていうのもわからない。

だからといって、ずっと黙っているっていうわけにもいかない。

あ、そういえば神官長様に何か調べ物を頼んでいたんだよね。

その事を聞いたら失礼になるのかな。

でも他に話すようなことも、何も浮かばないし。

直接的に聞くのはダメだろうから、遠まわしに聞こうかな。

そうすれば他に何かウィズが話を振ってくれるかもしれないし。

……ってなんて聞くの。遠まわしにって。

私の知識の引き出し、少なすぎて浮かばないよ。

えっと……。

「今日は神官長様をお願い事でいらっしやっただんですか」

結局これしか浮かばなかった。

「ええ、そうですね。お願いといえばお願いですね」

さっきまでの整った笑顔はどこへやら。

ふっと笑って、ウィズが意地悪そうな顔をする。

上品さの欠片もない、祭宮の仮面の下顔。

足を組み、両手を組み、まるで値踏みをするかのような目をする。

「気になる？」

しまった。

お茶なんてどうでも良かった。

ウィズと二人きりになるのは避けるべきだった。

と、思っても後悔先に立たず。

絶対対にウィズのペースに乗せられちゃいけないわ。

ウィズのペースに乗ったら、主導権をとられてまた巫女らしくない振る舞いをしてしまう。

ただでなくても巫女として認められていないのに、さらに侮られるような事になったら困る。

隙を見せない。

気圧されたらいけない。

表情を崩さない。

負けるもんか！

クスクスつとレッツの笑い声が聴こえてくる。

レッツ！笑わないっ。

- - はいはい。まあ頑張ってねー。サーシャ。

そう言つと、あははつと弾けるような笑い声が耳の奥に響く。

もっつ。レッツまで……。

絶対に私は無敵の巫女になってやるんだから。

崩した表情のウィズに一度微笑んで、小首を傾げる。

親しみはあるけれど、決して一步も踏み込ませないように礼儀正しさは残したまま。

「気になるというのは、どういう意味でしょうか」

もう一度微笑む。

内心の動揺を隠すために。さも余裕があるかのように。

でも敵もひるまない。

「別に、意味なんてないよ。言葉通り」

そうきたか。

「気になるかと聞かれたら気にならないわけではないです」

それは事実。

何しにきたのか気になるのは当たり前じゃない。

それを何でこの人ってば、踏ん返り返って面白そうに聞くわけ。

えらそうにして。

「ふーん。それで？」

なんか嫌な言い方。

それでって何よ。

はっ。

ここでイライラしてペースに乗ったら、いつもの通りになっちゃうんだわ。

いけない、いけない。

「水竜の巫女ですから。祭宮様がどんな御用でいらっしゃったのか気になるのは当たり前です」

どうだ。

「つまんねえの。模範解答をどーも」

ふんつと聴こえるようにウィズが溜息をつく。

感じ悪っ。

この人、こうやってたら王族っていうのが嘘か冗談みたい。

その辺のタチの悪い兄ちゃんにしか見えないわ。

「もうちよつと違う答えが欲しかったけど。今日はご報告に来たんだよ。あと依頼ね」

ウィズが奥殿のほうを見ながら、そう言う。

報告？

依頼？

何の事だろう。

奥殿から目を戻したウィズは笑っていない。

穏やかさの欠片もない、鋭い瞳で突然射抜かれる。

「皇太子殿下が無事即位することになった」

「そうですか。おめでとうございます」

ウィズの瞳に負けないように、とびっきりの笑顔を返し、深く頭を下げる。

真正面から向かい合ったら、多分、敵わない。

だから笑う。

何か思うところがあるからそういう目を、挑むような強い目をしているんだろうけれど、まともに受け止める必要はない。

それをこちらから聞いたなら、駆け引きに負ける。

揺らがない事が一番大切。

必ずどこかに逃げ道があるから、それを見逃さない。

完璧な策など、ありはしない。

確か書庫にあった本の中に書いてあったわ。

何でそんな本があったのかわからないけれど、寄贈の判が押してあったから、誰かの寄付だろう。

誰だかわからないけれど、ありがたい。

何となく暇つぶしに読んだのが役に立ったわ。

「今年は国中が祝賀で盛り上がりますね。子供の頃、現王陛下の即

位の時、村中お祭り騒ぎでしたもの」

一旦間をおいてウイズの方から、意図的に奥殿のほうへ目を向ける。

自然とウイズの視線も奥殿のほうへ向くように。

「先の大祭で水竜様が今年は穏やかな一年になるとおっしゃっていましたが、民にとってはよい年になりますね」

まるでレツに語りかけるように、でもウイズのも話しかけるようにする。

それからゆっくりと視線を目の前のウイズに戻す。

「そうだな。浮かれ騒いで、楽しい年になるんだろうな」

「あまり祭宮様が浮かれている姿って、想像がつかないですね」
浮かれて飲みすぎて道端で寝ていたり、陽気に笑いまくって踊ったりするんだろうか。

あんまり見たくないような。

「そう？ そんなことはないと思うけどね。ササはどうなの」
「え？」

「いや、何か真面目を絵に描いたような感じだから、羽目はずしたりしなそうだなと思って」

ウイズからはそんな風に見えていたのか。

意外。

「そんなことはないですよ。お酒を飲んで陽気になったりもしますよ」

「ふーん。全然想像つかないな。大体お前、酒飲めるんだ」

「失礼な。飲めますよ」

「あつそ。でも淡々と飲んでいるタイプだろう？」
ぐっ。

そういわれてみればそうかも。

大体周りの方が先に酔っ払って、笑い出したり泣き出したりしているかも。

「まあ、そう言われてみればそうかもしれないですね」
「凶星だとは何となく悔しくて言いたくない。」

「やっぱりな。お前って結構損するタイプだよな」

「何がですか？」

「ウイズが何を言いたいのかわからない。」

「周りに気を使って、羽目外せないんだろ」

「え？」

「何となく、そんな気がしただけ」

勝手に一人で納得して、うんうんと頷いている。

一体なんなの。何が言いたいの、この人。

さっぱり思考回路が読めないわ。

「まあいいんじゃないの。俺はそういうの悪くないと思うし」

だから、別に同意して欲しいなんて言ってないじゃないのよ。

話振ってきて、勝手に盛り上がって納得して、変な人。

「たださ、もうちょっと肩の力抜いてもいいと思うよ、俺は」

さらっと何の気もなしに言う。

でもその言葉が痛い。

どうしてだろう。

そんなに片意地張っているわけでもないのに。

私はただ巫女として精一杯頑張っているだけだよ。

それなのに、どこか見透かされたような気がする。

「抜くところ抜かないと、しんどくなるぞ。俺でよかったらいつでも

話くらい聞くからな」

柔らかな目。

ちよっと前の鋭さはまるで感じない。

そうやって優しくしたり、甘いことを言うから、心が曲がって挫けそうになる。

無理はしてないけど、でも本当の自分が出せなくて窮屈な気持ち。どうしてウイズにはわかつちゃうんだろ。

何でいつも、気付くのはウイズなんだろう。

自分さえも誤魔化しているのに。

でもきつとまた、祭宮のお役目だから、とか言われるんだ。

それで弱音を吐いたら、きつとちゃんと巫女として見てもらえなくなる。

私はウイズにちゃんと巫女として見て欲しい。接して欲しい。

だから、愚痴なんて絶対に言わない。

「大丈夫です。ありがとうございます」

声が自然と震えてしまう。

涙声になりそう。

だめだめ。

瞬きをして、瞳の奥の熱い塊を追い出す。

「あんまり私のペースを乱さないで下さい」

つつい恨み言の一つも言いたくなる。

「そんなつもりは無いんだけどな」

くすり、とウイズが笑う。

「ササのそういう顔が見られたから、いや」

「そういう顔って？」

「変顔」

もしかして、涙目になって変な顔になってたとか。
うわー。

やだな、どんな顔をしたらいいんだろう。

ウイズの顔、まともに見られないよ。

まず深呼吸をしよう。

落ち着かない。

もう一回しておこう。

ふー。

えっと、まず巫女笑顔の基本はなんだっけ。
咄嗟に出てこない。

イヤー！ 顔が作れない。

「おい、冗談だから」

さらっと言ってから、噴き出す様にウイズが大笑いする。

「あははははは」

部屋に響くウイズの笑い声。

からかわれた？ もしかして。

いい人かと思ったら絶対しっぺ返しにあうんだから。

もう、むかつく。

「何、笑ってるんですか。すっごく感じ悪いんですけど」

「悪い、悪い。ははははは」

「全然悪いって思ってたじゃないですかっ」

目に涙を浮かべて、ウイズがバカ笑いしてる。

もうっ。本当に腹立つんだから。

頭にきてウイズの事を睨みつけるけれど、そんなことはお構いなしで笑い続けている。

巫女らしくしなきゃいけないから我慢しているけれど、ものすごく文句言いまくりたいわ。

ウイズめー。

上品に文句言うなんて芸当、私に出来るわけが無い。

あー、もうむかつく、むかつく、むかつく。

「目が怖いから。あー。ごめんごめん」

くくつと笑いながら、片手を顔の前に持ってきて、謝罪のポーズをする。

「そんなことより、報告と依頼のうちの、依頼の方、聞いてません」
語尾が強くなったけれど、気にしない。

全部我慢できるほど、上手に感情をコントロールなんて出来ない

もの。

いい加減笑うのやめてよって思いながら、ウイズを思いつきり睨む。

「ごめんな」

苛立ちに気が付いたのか、もう一回そういうと、ぴたりと笑いが止まり、ウイズが真顔に戻る。

「依頼の方か」

口調からは軽快さが消え、重たい溜息を一つ吐き出す。
ウィズは少し何かを考えるように視線を動かす。

視線がぶつかり、そして奥殿のほうを見、腕を組みなおす。
奥殿の方を見えるということは。

「ご神託が必要ですか」

水竜の神託を、という依頼じゃないのかな。

いや、でも神官長様に何か調べ物を頼みにきたんだっけ。
ということは、神託が必要というわけではないのかもしれない。

「神殿の人に、戴冠式に出て欲しいんだ」

言い難そうに目を逸らしながらウィズが言う。

パキン、と何か枝が折れるような音が頭の奥でしたような気がする。
る。

多分、それはレッツが出した音。

頭の中でアラームが鳴り出し、胸騒ぎがする。

何となく伝わってくるレッツの気配にも、明らかな拒絶が含まれている。

「そうおっしゃるといふ事は、そのような慣例は過去にはないといふことなんですネ」

きっと、そういうことなんだろう。

妙に歯切れの悪い言い方だし、レッツを怒らせる可能性があることくらい、ウィズはわかっているのだろう。

「少なくとも、城の記録にはなかった」

やっぱり。

まじっく
政事には一切関わらない。

それが水竜のずっと変わらない信念。

だとしたらあえて「水竜の神殿」の人間が戴冠式という「政事」に参加するような事はなかっただろう。

「でも、もしかしたら城の記録にはなくても、神殿の記録には有る可能性も無い訳ではないだろう」

「それを神官長様に調べるように依頼されたんですね」

膨大な記録の中から探すのでは、時間が掛かって仕方がない。

あの巨大な書庫の本を一つ一つくまなく調べたら、年単位の時間が必要だわ。

とはいえ、さすがに全部の物を調べるわけではないだろうから、そんなに時間は掛からないだろうけれど。

それでもかなりの時間が掛かるんじゃないのかな。

「かなりのお時間が掛かるかもしれませんがね」

今日中に調べられるだろうか。

少なくとも数時間は掛かるし、その間に日が暮れてしまうかもしれない。

「ああ、だからまた別の日に改めようと思ってただけだな」

「そう、ですか」

何かがひっかかる。

どうして後日返答する事にしなかったんだろう、神官長様は。

そうすればゆっくり調べる事も出来るのに。

どうしても今日中に返答したかったから。

ウィズに頼まれて（正確には国王陛下に）早急に返答する必要があると考えたから。

それとも、ちょっと卑屈な考えだとは思っけれど、私と一緒にいたくなくて席を外したかったから。

そのどれも納得できそうだけれど、神官長様の真意を推し量る事

は出来ない。

だって、私には神官長様が何を考え、何を思っているのか、全く想像すらつかないんだもの。

「俺は、というか王宮の人間は、神官長様に参加して欲しいんだ」
そう言ったウィズの表情は、少しだけバツが悪そうだけれど、曲げられない意志のようなものが同居しているようにも見える。

でも神殿のトップである神官長様が参加するなんて、きっとレツは認めないと思う。

そうか、そのための前例探しのね。

今は認められないと言っても、もしかしたら前例があるかもしれない。

前例があればレツも首を縦に振るかもしれない。

神官長様も王都に帰りたいから、急いで探しているのかしら。

やっぱり神官長様でも、生まれ育ったところが恋しいのかもしれない。

だから必死で、少しでも早く調べて答えを見つけたかったのかも。
普段の様子からは、そんな風には全然見えないけれど。

でも本心を隠すのが上手な方だろうから、そんなことおくびにも出さないだけで、本当は帰りたいと思っというんじゃないとしても不思議はない。

「今まで随分長い間神殿を出ていないから、ご両親も心配しているし……」

そうよね。もう何年神殿にいらっしゃるのかしら。
ただでなくても体の弱い方だから、心配するわよね。

元気な様子が見られれば、ご家族の方もご安心なさるでしょうし。
「俺もお体の事が心配だし、一度責務を離れて休養するのも良いだろうと思うんだ」

俺も、心配なわけね。
それが本音かな。

「昔から線の細い方だったけれど、肌は血の気が引いたように白くなつてしまわれたし、抱いたら折れてしまいそうな位華奢になられて。お前もそう思うだろ」

え。ここで同意を求めるの。

「そう言われましても、私は以前のお姿は存じませんから」
抱いたら折れそうって言われても、そんなこと普通考えないからわからないって。

それに私は王宮にいた頃の神官長様なんて知らないもん。

「いや、ここ数ヶ月でまた痩せたみたいだ。さっきも顔色が悪かっただろ」

「そう言われてみれば、そうかもしれません」

正直そこまで観察するほど一緒にいなかったし、顔を逸らされていたからわかりません。

「もつとちゃんと気配りしてくれよ。ただでなくても病気がちな方なんだから」

苛立たしげに言うウイズに、何で私がつて言い返したくなっただけれど、その言葉は飲み込む。

私に対しては余裕ありありな態度なくせに、神官長様が絡むところも変わるのね。

前々から思っていた通り、ウイズは神官長様のことが……。

こんな形ではつきりと再確認させられることになるなんて。

わかっていたことなのに、胸がチクチクと痛む。

「ここは王都に比べて気候が穏やかとも言いがたいし、無理しているんじゃないかと、本当に心配だよ」

何かがすーっと音を立てて冷めていく。

目の前の、今までに見たことがない顔で心配しているウイズを見ていると、どんどん体の温度が下がっていくように、肌の周りを包

む空気が冷え込んでいく。

決して寒いわけじゃないのに、ブルツと首元に寒気がして震えてしまう。

「無理しないように、お前からも言ってくれよ」

言って聞く方なら、いくらでも言うわよ。

私の言う事なんて聞くはずないじゃない。そんなこともわからないの。

それに第一、今わたしはあなたが心配している方に避けられてますから。

会話すらまともに交わしてません。

「傍仕えの者にも、そのようにお伝え致します」

ウィズを一睨みするけれど、全く気が付いていないみたい。

「祭宮様が、神官長様のことを心配されているって」

吐き捨てるみたいになっただけれど、気にしない。

どうせそんなことにも気が付かないだろうから。神官長様のことで頭がいっぱいで。

「ああ、頼むよ。あとさ、水竜にもお願いできないか、神官長様のこと」

「は？」

思いつきり呆れ口調になったのは無意識。

気が付いてはっとするけれど、ウィズは全くその事には気付いていないみたい。

「だからさ、戴冠式に神官長様が出席出来るように」

「何をおっしゃっているんですか」

「だから、もし前例がなくても神官長様に王都にお越し頂けるよう、お口添えして欲しいんだ」

あ、そこに繋がるのね。

依頼は本当はその事だったのね。

神官長様が調べて出た結果どうこうはあんまり関係なくって、要

は神官長様を一時的に王宮に戻したいと。

戴冠式に出席というのは、あくまでその口実で。そうか、そこまでしてでも王宮に戻したいのか。でも絶対にレッツは了承しないと思うけれど。

ねえ、レッツ。

レッツを呼ぶと、一気に肌が粟立つ。

体中の神経が剥き出しになったみたいになり、一気に奥殿との隔たりがなくなつて距離が近くなる。

レッツが目の前にいるような、そんな錯覚に陥る。

- - ボクが何で国王なんかにはひれ伏して、おめでとう何て言わなきゃいけないわけ。バカバカしいっ。

そう言うと思つてた。

- - 神官長が国王に頭を下げる事は、ボクが頭を下げる事と変わらない。

うん。神官長様が「水竜の神殿」の表の顔だもんね。

神殿を代表するものが頭を下げるなんて。

- - ボクは絶対にイ・ヤ・だ。この件に関しては絶対にボクはひかないよ。

うん。わかってるよ、レッツ。

- - その目の前の大ボケ野郎追い返しといて。ボクはもうそいつ

の声すら聞きたくない。

ずっとレツの気配が遠のくを感じる。

このまま回線が切れるのかと思った瞬間……。

- - 今は返してやんないって伝えといて。そっちの都合じゃ動かないんだからね！

耳元で怒鳴られて、キーンという音が耳に響く。

この件に関してはもう何も言いたくないって感じで、扉を思いっきり閉められた時みたいな音がして、空中に広がっていた感覚が一気に体に戻ってくるような、ドンっという衝撃を受ける。

レツ、レツってば。

もう一度読んでみたけれど、返答はない。

本当にこのことの間を遮断しているみたいで、声が返ってくるところか、自分の声すら霧にかき消されてしまうみたいになる。

目の前にいるウィズを見たら、なんだか何を言うのもイヤになってくる。

どうせこの人に何を言っても聞く耳なんて持ちやしないんだろうし、でもそれでも納得してお帰り頂かないといけないわけで。

面倒くさい。

真底面倒くさいわ。

こないだ言った事も忘れているみたいだし、そこから言わなきゃいけないの。

そう思うと溜息がこぼれるのを我慢する事が出来ない。

イライラと言葉を探していると、トントンと扉を叩く音がする。
神官長様がお戻りになられたのかもしれない。

そうしたら前例が無いから無理って、神官長様から言って貰えるかも。

期待をして扉のほうに目を向けると、トレーにカップを載せたシレルが入ってくる。

シレルが悪いわけじゃないけれど、がっかりした気分は隠しようがなく、小さく一つ溜息をつく。

ウイズにもシレルにも気が付かれないように。

目の前にカップが置かれ、シレルに笑顔を向ける。

「どうもありがとう」

「いえ」

そういつて頭を下げてから、シレルが横に跪く。

何か話があるといった素振りで。

シレルの方に体を傾け、意図的に耳をシレルの顔のほうへ近づける。

抑揚の無い低い声が、ウイズには届かないくらい小さな声で耳に入ってくる。

「まもなく神官長様がお戻りになるそうです」

わかった、と告げる代わりにシレルにわかる程度に頷く。

意外に早く調べ終わったのね、と思ったけれど、それも口には出さないでおく。

シレルは立ち上がり、この部屋に私がいる時の定位置である扉の傍にすつと立つ。

きっとシレルのことだから、いつも寸分変わらず同じ場所に立っているんだろう。

ウイズのほうに向き直ると、湯気の向こうでいつものような祭宮の顔をしている。

本心がまた見えなくなる。

でもその本心を知る事が出来てよかったのか悪かったのか。

そんなに神官長様のことを想っていたなんて、全然気付かなかった私が間抜けなのかな。

うつん。本当はわかっていたのに、私はずっと認めたくなかったんだわ。

いつそウイズの事を嫌いになれたならいいのに。

胸に光る青い石を捨てる事も出来ない。

身に着けるのをやめればいいのに、それすら出来ない。

レツにしか本心は見せないって決めているのに、ウイズの顔を見たら心が揺らいでしまう。

私の手には届かない人。

わかっているのに認めたくなかった。

でも認めるしかない。

だってウイズはこんなにも神官長様のことに一生懸命なんだもの。

そんな人になんて言って諦めさせたらいいの。

巫女としてきちんと説明しなきゃいけないって事は十分わかってる。

どんなに求めたって、決してその願いを叶えることが出来ないって言わなきゃいけないい。

上手に、語彙の少ない私に出来るだろうか。

巫女なんだから、出来るかじゃなくて、やらなきゃいけない。

「水竜は一切政事には関わりません」

意を決してウイズの顔を見る。

もうあの余裕綽々はウイズでも、神官長様のことを心配しまくるウイズでもない、祭宮が目の前にいる。

それはある意味ではとてもラッキーかもしれない。

まともにウイズに感情をぶつけられたら、恐らく巫女らしくなん

とても無理だから。

きつと私も感情的になっちゃってしまうから、話し合いにもならなくなる。

今ここにシレルがいてくれてよかった。

「以前にも申し上げましたとおり、王家の方々が行う『政』には干渉いたしません」

覚えていないはずはない。

絶対に忘れてなんていないはず。

ウイズの瞳の中に、ゆらりと動くものがあるのがわかる。

あの時と同じような鋭い炎が点っている。

でもこのことに関しては絶対に曲げられない。

それがレツの意思。

レツの、水竜の意思が絶対。

この国を真に統べるモノが、他の者に跪くような事はあってはならないから。

「それは存じております」

カップのお茶を一口飲み、ウィズが瞬きをして見返してくる。

皇太子殿下が即位すると言った時と同じ、強い意志を宿して。

その目を見て、ハッと気が付く。

そうか、ウィズは私を見ているんじゃない。レツを見ているんだわ。

巫女という入れ物を通して、レツを睨みつけているのね。

でもレツはもうウィズと向かい合う気なんてさらさら無い。

その気配は、一切届いてこない。

そんなことに巫女でないウィズが気付くはずも無い。

けれど、あえて口にしないでウィズを見返す。

その目に私はどんな風に映っているんだろう。

緊張感ないなって自分でも思うけれど、ちゃんと巫女として映っていればいいなって思う。

ササである私を見てくれなくていい。
せめて巫女である私を認めて欲しい。

「水竜様が政事に関わらないというのは、以前にもお聞き致しました。けれど神官長様のお体が心配です」

「心配だから、という理由で水竜のご意思は変わりません」

少し強い口調になるウイズに、努めて冷静に接する。

不思議と私の心の中は凪いだ湖のように静か。

辛いとか悲しいとか不安とか、そういう感情はどこかへ吹き飛んでしまったみたい。

「巫女様は神官長様のことが心配ではないのですか」

「そんなことはありません。しかし神官長様には専属の侍医もついております。確か王宮で診ていただいていたお医者様だと聞いています。ですので私は安心してお任せしております」

につこりとウイズに微笑みかける。

何故だろう。一言言葉を発するたびに、心の中の何かが崩れていく。

その「何か」が剥がれていくたびに、少しずつウイズとの距離が広がっていく気がする。

「しかしこちらの環境は神官長様にはご負担になるのでは」

「どうしてそう思います」

「え？」

聞き返されるとは思っていなかったようで、ウイズが面食らったような顔をする。

そんな顔、初めて見る。

ウイズでもそんな顔するんだ。私、本当にこの人のこと何も知らなかったんだなあ。

そんな風に客観的に事態を見つめられるほど冷静でいられるなんて、まるで自分じゃないみたい。

思わず口元に笑みが浮かんでしまう。

自嘲の笑みが。

それをウイズがどう捉えたかはわからない。

全く表情を変えないから。

「確かに王都に比べれば気候はよくありません。けれど、神殿にはなくてはならない方。誰もが神官長様に心地よくお過ごしただけのように尽力しております」

よくもまあペラペラと口が回る。我ながらすごい。すごすぎる。

「祭宮様は神官たちをお疑いになられるのですか」

決して「はい」とは言えないのはわかっている。

部屋の片隅には神官の一人が控えているのだし。

「いえ。そういうつもりではありません。ただ以前より明らかに顔色がよくない良くないように感じます。巫女様はそう思われませんか」

「そうかもしれませんが、それが王都にてご静養される事とは繋がりません」

一呼吸置いてウイズを見る。

何故かウイズがそつと目を逸らして、窓のほうに目を向ける。

つられるように窓の外に目を向けると、暖かい春の日差しに木々が輝いている。

「巫女様とは違い、神官長様がこの神殿から出てはいけないという規則は無いはず」

「そうですね。そう伺っています」

「では何故駄目なのです。神官長様のお体を最優先に、なぜお考え頂けないのか」

ウイズが声を荒げる。

そう、そんなに心配なの。

でもごめんなさい。私は首を縦には振れないわ。

だって……。

「もつとも大切なのは水竜のご意思です」

ピシヤリとウィズを撥ね退けるように言い放つ。

目線が交錯する。

私はもう、その目に動揺したりしない。

「戴冠式に神殿のものが出席する。形はどうあれ、水竜が国政に関わる事になります」

絶対に、目を逸らしたりはしない。

喉の奥に焼ける様に熱い塊があつて、それを飲み干すために一度唾を飲み込む。

けれど熱さは変わらないまま。

「水竜は決してあなた方王家の方に頭を垂れる事はありません」

「それなら戴冠式の中で、決して神官長様が下座に着くようなことや、頭を下げるような事は無いようにするから」

必死な顔。

いつの間にか祭宮の仮面が少し外れている事に、ウィズは気付いていないみたい。

「いいえ、そういう問題ではありません。わざわざ神殿の者が参加するという事自体が認められません」

「それは水竜のご神託なのか」

疑いの目が向けられる。

やっぱり巫女として認めてくれないのね。

私が感情でこんな事を言っていると思っているの。

どうしてあなたには何も伝わらないのよ。

「私をお疑いになつていらつしやいますか。それとも水竜を疑つていらつしやいますか」

喉につかえている熱さは体中に広がっていく。

その熱さとは対照的に、私の声はどんどん冷えていく。

「恐らく前例は無いでしょう。そしてこれからも永遠にありません」

ウィズは頭を抱え、ソファに深くうなだれる。

「何なんだよ」

吐き捨てるような小さな呟きが聞こえたけれど、聞こえなかったふりをする。

熱さを消そうとテーブルに置かれたお茶を一口ふくんで喉を潤す。けれどやっぱりそれは消えることは無い。

ウィズを見ている限り、この熱は消えてくれないのかもしれない。まもなく神官長様もお戻りになるようです。私はこれで失礼いたしますね」

うつむいたままのウィズに声を掛け立ち上がる。

扉のほうに目を向けると、シレルが会釈をする。

「待てよ」

低い声がして振り返ると、ウィズが顔を上げ、憤りを隠さず真正面から睨んでくる。

「これ以上、私から申し上げる事はありません。祭宮殿下」

意図的に、祭宮殿下を強調して言う。

微笑を付け足すのも忘れずに。

「ササ！ 何なんだよ。何を怒っているんだよ！」

怒っている。私が？

何で、怒るようなこと、何も無いじゃない。

「怒ってなんていません。私は伝えるべき事はお伝えしましたから」

ウィズが立ち上がり、手を伸ばそうと持ち上げた腕に、青い石が見える。

二つで一つ、対の石。

この石みたいに私たちは対の存在。

国王陛下の窓口である祭宮。

水竜の窓口である巫女。

どちらが欠けてもこの国は成り立たない。

けれどその間には神官長様という二つのものをくつつける存在が必要で。

本物の石みたいに二人で対には、なれない。

ウイズの伸ばされた手は、私に触れる少し手前で止まり、そしてまた力なく下へ落ちる。

「ササ、なんだよな」

確認するように、ポツリとウイズがつぶやく。

「ええ」

それ以上の言葉が繋がらない。

ウイズは何を確認したかったのだろう。

ササなのかと問われれば、答えはイエス。

私が水竜の巫女になっても、サーシャという名前を捨てたわけじゃないから。

「そうですか。わかりました」

ウイズがまた祭宮の顔に戻る。

さっきまでの勢いは消えたけれど、頬が少しだけ紅潮している。

「お時間をとらせてしまい、申し訳ありませんでした」

深く頭を下げて、ウイズが形式ばった言葉を述べる。

「巫女様のご健勝でありますように」

「祭宮様もお元気で」

ウイズが顔を上げる前に扉へと足を向ける。

それが非常に失礼なことだってわかっている。

でも私はもうウイズの顔を見たくないんだもの。

胸の中の熱さがこみ上げてきて、耐えられなくなっちゃうのがわかってから。

本当は走り出したいのを懸命にこらえているくらいなんだから。

扉を出て前殿へと続く通路に出たら、自然と駆け出していた。

一秒でも早くウイズのいるところから離れたくて、止まったら涙が溢れ出してきてしまいそうで、無我夢中で走りぬけた。

耳には私の踏む梢の音と、自分の荒い息遣いしか聞こえてこない。なのに頭の中には、何度も何度もウイズの言葉が繰り返される。

- - 俺でよかつたらいつでも話くらい聞くからな

- - ササのそういう顔が見られたから、いーや

一緒に思い出すのは笑顔。

目じりが下がって、いつもより少し子供っぽく見えるときもあるし、まるで何も心配しなくていいんだよって言うような優しい顔で笑うときもある。

色んな笑顔が浮かんでくる。

そっか。私、ウイズの笑った顔、好きだったんだ。

- - 気になる？

- - つまんねーの。

意地悪な顔。

ふてくされたような顔。

祭宮じゃない、私が村で一番最初に会った時のウイズの顔。

その辺にいる普通の人みたいな、決してお上品じゃない、どちらかというと傲慢で自信満々の鼻持ちなら無い態度。

でもそれが嫌だなんて思ったことも無かった。

むしろ、心のどこかで飾らないウイズの事を好ましく思っていた。きつと神官長様にはこんな顔してないんだろっな、なんて考えて

一人優越感に浸っていた事もある。

- 俺もお体の事が心配だし……。
- 抱いたら折れてしまいそうな位華奢になられて。

パリンつとガラスの割れるような音がした。

何かを踏んだのかと思って足元を見ただけで何も落ちてなくてその音が頭に響いて、手も足も凍りついたように動けなくなってしまった。

砕けたのはなんだったんだろう。

もしかしたら私の心だったのかもしれない。

何を期待していたんだろう。

どうして樂觀していられたんだろう。

住む世界も育ってきた環境も、何もかもが違う人なのに。期間限定。

今だけの対等な関係だって事、わかっていたのに。

なのに、甘い夢を見ていた。

とても幸せな甘い夢を。

まるで吟遊詩人が語るような、おとぎ話のような子供じみた空想。

王子様が迎えに来るよ。

何もない普通の「あたし」のところに、見目麗しい王子様が愛の言葉を囁いて。

そんなのは現実にはありえないんだってことくらい、私は知っていたじゃない。

なのに巫女に選ばれて、ウィズに出会って、私は魔法をかけられたみたいに一気に違う世界に連れてこられて。

舞い上がっていたんだわ。

自分が特別だっと思って思い込んでいたんだ。
もうそんな幻想とは、さよならしなきゃいけない。
現実。

まるで夢のようだったとしても、私が巫女なのは真実。
私がしなきゃいけないことは何。

ここに何をしにきたのよ。
ふっと周りに目を向けると、前殿が木々のアーチの向こうに見える。
る。

前殿。

神殿。

水竜。

ご神託。

私の前にあるのは、責任。
それを話すのに相応しいようにならなきゃ。

なりたいのは、誰にも認められるような巫女。
巫女になった日から、私なりに頑張ってきた。
水竜レツは私のことを認めてくれるのに、認めてくれない人たちがいる。

私には何が足りないのだろう。

巫女としての威厳、華やかさ、神秘さ。
そのどれも足りていないからなのかな。
弱い自分がいるから。

だから私はいつまでたっても巫女として認めてもらえないのかな。
ポツン、と手の上に涙が零れ落ちてきた。
認められないことが悲しい。

どんなに努力しても届かないのが悔しい。
あがいても伝わらない気持ちがもどかしい。
色んな気持ちが交じり合って、涙が止め処なく流れてくる。
せめて私を認めてもらえるように、心に鎧をつけよう。
誰にも弱いところを見せないように、踏み込ませないように。
もう絶対に涙なんか流さないでいられるように。

走って乱れた服を整えるようにはたと、斜め後ろに立ち尽くす
シレルが視界に入る。

目が合うと軽く会釈をし、一步近付いてくる。
何か言いたそうな様子のシレルの顔を見るのさえ腹立たしい。
弱いところを見せないようにって思った途端に、こんな情けない
顔見られてる。

それにどうせ言われる言葉は決まってる。
走るなんて巫女らしくないとか言われるんだわ。
言われる事がムカつくんじゃないかって、そういうことを言わざる
をえない状況を作った自分にイライラする。

どうしてうまくいかないの。
なんでになりたい自分になれないの。
うつん、全部自分で壊しちゃってるんだよ。

今まで積み上げてきた「巫女」を。
頑張ってるんだから認めてよ。
少しくらい走ったっていいじゃない。

情けないと思う自分と、どこか開き直る自分がいて、本当に私っ
てどうしようもない。

色んなモヤモヤを振り切るように頭を数回左右に振る。
強く瞑った目からは涙が零れ落ちる。
頭の中に浮かんでは消えるウィズの声を、涙と一緒に追い出して
しまいたい。

「どうなさいましたか」

心配げにシレルが問いかける。

突然走ったかと思っただけ立ち止まって何度も頭を振って、しかも泣いたりしてて、どこかおかしいと思われてもしょうがない。

そう言いたくなるのも、わかる。

シレルがずっとハンカチを差し出すので、シレルとハンカチを見比べる。

「どうぞお使い下さい」

言われてはじめて、沢山の涙が頬を伝っていた事に気付く。

ありがとうと言いたくても、喉の奥につかえて言葉が出てこない。頭を下げてハンカチを受け取ると、頬に流れる涙を押さえる。

止まって。

こんなところで泣いていたら、本当に全部台無しになっちゃう。

シレルに泣いている姿なんて見せたらいけないのに。

「そのようにお泣きになれば、水竜もご心配なさいます。どうかお心をお鎮め下さい」

シレルに言われた「水竜」という言葉で、ずっとレッツと話していなかったことを思い出す。

レッツ。レッツ。

心の中でいつものようにレッツを呼ぶ。

ぐっと引き寄せられるように体を引っ張られる感触があつて、奥殿のレッツの声が頭の中に響き渡る。

――なに。そんな情けないサーシャはボク嫌い。

これでもかっていうような大きな溜息のおまけつき。目には見えないけれど、すごく冷たい視線を感じる。

- 説教は後回し。とつと帰ってきなよ、おバカさん。

怒ってるの？

- 怒ってない。呆れてんの。

ごめんなさい。

- なんてボクに謝んの。バカじゃないの。いーから早く問題を片付けて戻ってきな。

問題？

- あーもうっ。本当にバカだなサーシャは。ボクの神託を伝えなきゃいけない相手がもう一人いるでしょ。

……神官長、様。

- 忘れてたわけじゃないよね。で、そのみつともない顔、神殿中に晒すつもり？ せいぜい無い知恵絞るんだね。

嘲笑交じりのレツの声がそこで途絶える。

怒ってるんじゃないかって、呆れてるって言った。

私、レツを失望させちゃったの？

どうしよう。どうしよう。

急に不安が襲ってくる。

一気に全身の血の気が引く。

足元をすくわれたような、暗闇に放り出されたような。

考えたくない一言が、心の中ですら形にしたいくない言葉が突き刺さってくる。

サーシャなんてイラナイって言われたら。

その一文が浮かんだと同時に体中に震えが走る。
嫌。

私、そんなの嫌。

両手で自分の体を抱きしめて、無理やり震えを押さえ込む。
それでも湧き上がってくる強い恐怖心には勝てそうに無い。
涙なんてどこかへ吹き飛んでいつてしまった。

私、私にはやらなきゃいけないことがある。

ちゃんとしなきゃ。

レツの信用を取り戻さなきゃ。

ちゃんとやり遂げなきゃ、レツに必要としてもらえなくなる。

ここにいらなくなるかもしれないという恐怖感が、涙を吹き飛ばしていった。

うつん。どちらかという血の気が引いたっていうほうが正しいかも。

冷静になった頭で考える。

とにかく情けない私は今は姿を消して、しっかりしなきゃっていう気持ちで前面に出てくる。

レツに認めてもらえるように。

レツにこれ以上呆れられたくない。

そのためにはまず、ご神託を神官長様に伝えないと。

だけど、そのためには神官長様と対峙しなくてはいけない。

私をずっと認めてくれない神官長様にも、これ以上見くびられたくない。

誰にも侮られない巫女を演じきらなくちゃ。

そのためにはどうしたらいい。

本来なら一番相談に乗ってくれる存在の「神官長」様が、私にと

ってが一番気の抜けない人。

どうしてもだかわからないけれど、口を利いてくれないくらいに嫌われているし。

別に、好かれないとか思わないけれど、こんな時思う。

誰も頼れない。誰にも相談できない。

誰にも心中を明かす事が出来ない事が苦しいって。

私の経験や知識じゃどうやって取り繕うのか、正直どうしたらいいのかわからない。

それでも、自分なりに見つけ出さなくちゃ。

シレルに神官長様の今いる場所を聞き、そこでしばらく待つて頂くように伝言を頼み自室に戻る。

幸い、ほとんどというか全く神官に出くわさなかったので、レツいわく酷い顔を誰にも見られないで済んだ。

部屋に戻ると大急ぎで顔を洗う。

鏡の中の私は、本当に酷い顔をしている。

お化粧が崩れたからってという事よりも、心の中の人間らしい感情を全部むき出しにしているかのような真っ赤に腫れた瞳。

これを見てシレルはどう思ったんだろう。

巫女らしくない、巫女にふさわしくないって思ったんだろうか。

気になるけど、聞けない。

聞くのが怖い。

もともと、聞いたところでシレルは答えてくれないだろう。

いつも事務連絡しか口にしないんだから。

って、私シレルに何を求めているの。

シレルはきちんと仕事をこなしているだけじゃない。

それなのに仕事以上の心遣いを求めている。

そんな風に人に何かを期待しちやいけない。

期待するから辛くなる。不満が残る。恨みっぽくなる。

そういう感情に捕らわれるから、余計に「巫女」から遠ざかっているのかもしれない。

だから、ここに感情は置いていこう。

そうすれば、きつとどんな時も強くいられる。

顔を洗ってもひききらない目の赤みを隠すために、儀式のときにしか着けない顔を隠すベールを着ける。

これがあれば、至近距離に寄られない限りは表情さえもわからないはず。

あまり待たせるわけにはいかない。

待たせた挙句、また祭宮と三人で話すようなことになったら最悪だから。

あの微妙な空気の中で三人で話をするなんて、絶対嫌。

今日はもう祭宮の顔なんて見たくも無いし、あの二人の間に割って入って話をするのなんて絶対に頼まれたってしたくない。

考えただけでもイライラしてきて、お腹のあたりがじわっと熱くなる。

本当に、それだけは絶対やりたくない。

鏡の中の自分を振り返らずに、部屋を後にした。

神官長様は書庫にいらつしやるという事だったので、部屋からさほど遠くない場所なので、すぐに書庫に辿り着いた。

扉の前にはシレルが直立不動の姿勢で立っていて、顔がわかるくらいのところになると、深く頭を下げる。

扉に近付き、シレルの前までくると頭を上げて扉をノックする。

トントン、という乾いた音が廊下に響く。

シレルが扉を手前に開いて「どうぞ」と一礼する。

その姿に「ありがとう」と短く答えてシレルを見返すけれど、べ

ールで死角になっているせいか、その表情はわからない。

扉の中に数歩踏み込み、書庫の中を一瞥すると、あちこちに神官がいて所狭しと平伏している。

その中で一人、安楽椅子に座って膝に本を一冊乗せたままの神官長様が目に入る。

まるで他の景色から切り取られたように、神官様を取り巻く空気だけが穏やかで落ち着いている。

何故だろう。

この人も目の前にして、お腹の底からフツフツとイライラが湧き上がってきて抑えられない。

さっき感情は全部おいていこうと、感情は表に出さないようにしようと思ったばかりなのに。

顔を見たら、思わず奥歯を噛み締めずにはいられないほどの怒りがこみ上げてくる。

悔しい。

にくつたらしい。

見返してやりたい。

私の心は暗いドロドロした渦の中に巻き込まれていって、黒く埋め尽くされていく。

それでもこの人には負けたくないから、ぐつとこぶしを握り締めるように、体の前で合わせた両手を握りしめる。

「お待たせして申し訳ありません」

そう告げると、神官たちは一度目を上げ、それからまた床に額をこすりつけるように平伏する。

一斉に頭を下げるので、視界が髪の色に染まる。

そんな中でも一人涼しい顔で、神官長様はこちらを見ている。けれど、何も言おうとはしない。

その態度がまた、私の中のちっぽけなプライドを傷つける。

巫女だつて認めてくれないから、頭を下げるのが嫌なんだわ。

ギリリつと無意識に自分の歯を食いしばる音がする。

ダメ。ここで感情的になるわけにはいかない。

「どうぞ頭を上げてください。そのように頭を下げず、私の言葉を聞いて下さい」

ある者は何うように、ある者は疑わしいものを見るような目で顔を上げる。

これだけ沢山の神官の前でご神託を告げるなんて、そう思うと全身に緊張が走る。

「せっかくお調べいただいたのですが、今回祭宮様からご依頼の件に関しまして、水竜様よりご神託を賜りました」

恐らくその事はシレルから神官長様に伝わっているのだろう。

眉一つ動かさず、まるで人形のようにこの部屋に入ったときから変わらない。

対照的に、神官たちの間にざわめきが走る。

ざわめきが収まるのを待つようにしていると、神官長様の傍に控えている年長の神官がぐるりと視界を回す。

その視線が無言の圧力のように、ぴたりと神官たちが口を閉じていく。

薄暗い書庫の中の空気がピンと張り詰める。

ただ一人を除いて、全員の視線が突き刺さる。

「ご神託を申し上げます」

自分の吐く息の音さえ聞こえるんじゃないかって言うくらいの静寂が訪れる。

次の言葉を誰もが待っているのはわかっている。

けれど、より効果的に聞こえるように、意識的に間をおく。

一回、二回と息を吸って、二十まで数えたところでもう一度口を開く。

これだけ間をおけば、誰しも早くご神託を聞きたいと思う気持ちが募るはずだから。

「水竜は一切の『政事』に関与しません」

一呼吸置いて、神官長様を睨みつける。

どうせどんな顔をしているかなんて分かりはしない。

扉から入ってくる光を背に受けているから、逆光になっているしベールで顔を隠しているんだから、口調さえ気をつければ大丈夫。

「おわかりになりますね」

あなたは巫女だった人なんだから。

「この神殿の者が王家の行事に参加する事は認められません。恐らく前例も無かったのではありませんか」

神官長様はまるで何も聞こえなかったかのように、表情一つ変えず何も言おうとはしない。

代わりにその問いに答えたのは、さっき他の神官たちを威圧した神官だった。

「おっしゃるとおりでございます。我々でお調べいたしました、そのような記録は残ってはおりませんでした」

やっぱり。

ふっと口元に笑みが浮かぶ。

あのレツの感じだと、前例は無いだろうとは思っていたけれど、もしかしたらあるかもしれないという疑いの気持ちを捨て切れなかったから。

「調べていただいて、ありがとうございます」

くるりと視界を巡らし、息を潜めている神官たちにお礼をする。形としては神官長様が調べた事になっても、実際にはここにいる沢山の神官たちが膨大な書物を一冊ずつ目を通して調べてくれたのだから、きちんとお礼をしたかったから。

それからまた、微動だにしない神官長様に目を向ける。

目の前の景色を瞳に映しているはずなのに、その視線はどこか遠くを見ているような表情をしている。

「久しぶりにお里帰りなさりたかったかもしれないですが、残念で……」

「水竜様がそうおっしゃったの!？」

突然瞳に生気が宿り、激しい口調で今にも立ち上がろうかという様子で神官長様が言葉を遮る。

何をそんなに、とあまりの勢いに圧倒される。

それは神官たちも同じようで、驚きのまなざしを神官長様に向けている。

「答えなさい。それは水竜様のお言葉なの?」

詰問するような口調に、抑えていたイライラが少しあふれ出してくる。

何でそんな風に言われなきゃいけないわけ。

そうやって、いつも私の言葉を疑っているんでしょう。

なんなのよ。

何でいつもそうやって頭ごなしに言うわけ。

あなたが王族で前の巫女で今は神官長でこの神殿のトップでも、今は私が巫女なのよ。

いい加減信じてくれたっていいじゃない。

「ええ。水竜は戴冠式に神官長様が出席する事は認められないと、この件に関しては曲げられないとおっしゃいました」

丁寧な口調は心がけても、言葉尻がどうしても強くなる。

私は嘘なんてついていないわ。

レツは言ったもの。

絶対にイヤだって。王家の都合じゃ動かないって。

それを疑っているわけ?

あなたは自分の耳で聴いた水竜の言葉しか信じないの?

私っていう巫女の言う事なんて、嘘ばかりだっと思っていたの。
あなたのご神託を聴いて、私が巫女になったんでしょう。

他の誰も巫女だって認めないなら、どうしてあなたは神官長なのよ。

本当に腹が立つ。

ム力つく。ム力つく。ム力つく。

「そのことじゃないわ。わたくしが里帰りをしたいって、水竜様がおっしゃったのかしら」

返ってくるのは、神官長様らしからぬ強い口調と射抜くような視線。

「いいえ。そうはおっしゃいませんでしたけれ……」

「でしたら余計な事は口を慎んだ方が良くいんではなくて？ 水竜様のご神託ではないのでしょうか」

また遮るように、嘲笑混じりに言う。

何なのよ。

ちよつと氣遣ってみただけじゃない。

帰れなくて残念ですねって言おうとしただけなのに、そんな言い方しなくたっていいじゃない。

こんな大勢の神官がいる前で。

恥をかかせたいってことなの。

それとも神官たちに私は巫女にふさわしくないと印象付けようとしているわけ。

うまく言い返せないのが悔しい。

ご神託じゃないのは事実だから。

伸ばした爪が掌に突き刺さる。

握る手に更に力が入って、

「わたくしは王都に行きたいなんて思っていますわ。水竜様にもそうお伝え頂けるかしら」

余裕の笑みがまた腹立たしい。

そうやっていつも私を馬鹿にする。

私が至らないのはわかってる。

だけどそんな言い方すれば、誰だって嫌な気持ちになるって事、あなたにはわからないのかしら。

悔しい。

何とかして言い負かしたい。

「そうやってムキになって否定なされると、余計疑わしく思えてしまいます」

ごくり、とつばを飲み込む音が喉に響く。

こんなことしか、今の私には言い返すことが出来ない。

鼓動の音が耳に痛いくらい、大きな音で聞こえてくる。

「祭宮様が大変ご熱心に神官長様をぜひ王都へとおっしゃいましたから、てつきり神官長様からお頼みしたのかと思っていました」

ぴくり、と神官長様の眉が動くけど、畳み掛けるように言葉を続ける。

神官長様がしたのと同じように、嘲笑を交えながら。

「本当にご熱心で、私が何度もご神託ですからと申し上げたのですけれど、なかなかご理解いただけない程でしたから、神官長様からも祭宮様に無理だとお伝え下さいね」

「わたくしがお頼みしたわけではないわっ」

真っ赤な顔で否定する。

その怒りに満ちた神官長様の顔を見て、私の心はどこかすーっと晴れていった。

「興奮なさいますと、お体に障りますよ」

いたって冷静に言うと、神官長様がぐっと言葉に詰まる。

「祭宮様をあまりお待たせするのは失礼ですから、私はこれで失礼致します。神官長様、祭宮様によりしくお伝え下さい」

極力穏やかに、諭すような口調で言い、書庫に背を向ける。

初めて神官長様の雰囲気には圧されなくて、ちゃんと言いたいことが言えた。

それにちゃんと伝えるべきご神託も、沢山の神官がいる前でもきちんと伝える事が出来た。

ねえ、レツ。

私きちゃんと巫女の仕事が出来たよ。

だから、今私から巫女を取り上げないでね。
私まだここにいたいから。

巫女じゃなくなったら、ここにいられない。
レツとまだたくさん話だってしたいよ。

「キミの心を見せてあげるよ」

レツの姿は見えないけれど、広い奥殿の中に静かに、けれど鮮明にレツの声が響き渡る。

まるで泉に零れ落ちる水が波紋を広げていくように、レツの音がすーっと広がって心の中に入り込む。

上手くご神託を伝えられたっていう興奮が、レツの声で急速に小さく萎んでいく。

触ると熱いくらいだった紅潮した頬の温度も、あっという間に引いていく。

キミの心を見せてあげるよって、一体どういう意味なの？

全神経が研ぎ澄まされて、レツへと紡がれていく。

「レツ」

見えないレツの姿を探して、首を振り周りを見渡しながら奥殿の奥へ向かって歩いていくけれど、レツの姿はどこにも見えない。

ボタン。

背後で扉の閉まる音がして振り返る。

そこにレツがいるのかと思って振り返ったのに、レツの姿は無い。きつといつものように、その力で、見えない手で扉を閉めたんだろっ。

そう思い、溜息を一つついてから奥殿の奥へと目を移す。

天窓から降り注ぐ淡い光の中、ここにいるはずの無い人がいる。

どうして。

なんでここにいるの？

その姿を見たら、言葉を失ってしまった。

にっこりといったもののように余裕の笑みを浮かべて、青い石の光る右腕を差し伸べて。

こんなところにいるはずがないのに。

心臓が早鐘のように高鳴り、耳にうるさいくらいの音を立てる。

伸ばされた右腕で手招きしているのが見える。

その声は聞こえないけれど、口が私の名前を呼んで動く。

この神殿の誰も、私の名前を呼ばないのに。

まして、村で呼ばれていたときのように呼ぶのはあなただけ。

その人の名を呼ばうとするけれど、パクパクと口が動くだけで言葉にならない。

喉が焼けるように熱くなり、その熱が喉から胸へ、そして全身へと広がっていく。

その人の名前を口にしたら、私の中の何かが崩壊する。

諦めよう、もう忘れようと思っていた想いで、胸の中がいっぱいになる。

ここは奥殿の中なのよね。

私、水竜の神殿にいるのよね。

なのにどうして、何でこんなことが。

巫女意外は入れない場所なのに、どうしてあなたがここにいるの。
祭宮カイ・ウィズラール。

手招きをやめ、ふっと意地の悪い笑みを浮かべ、一步一步こちらへ近付いてくる。

瞬きする事も出来ない。

その姿から目が離せない。

確かに、さつき会ったのと同じウィズその人だわ。

こんな事ってあるの？

どうしてこんな風にここにいるの？

奥殿は私以外は誰も入れない。それ以前に神殿の中に外部の人間が入ることは許されていないのに。

何であながここにいるの。

声に出せないまま、何度も何度も問いかける。

その間にどんどんウィズは近付いてくる。

諦めなきゃいけないって、わかっているのに。

ウィズは私のことなんて見ていないってわかったのに。

たった一人、神官長様だけを想っているのに。

もう期待したらダメなんだって、身をもってわかったばかりなのに。

それなのに、こんな風に出会ってしまったら、心のタガが外れて気持ちが抑えられなくなる。

伸ばされた手を取りたい。

いつそこの気持ちを打ち明けてしまいたい。

どうしようもなく恋焦がれる熱情の渦に、飲み込まれていってしまえそう。

こんな風に強く人を好きだなんて思ったことは無い。

ウィズに会っている時だって、意識する事なんて無いのに。

体中から好きっていう気持ちが溢れ出して止まらなくなる。

少しずつ近付いてくる姿から、片時も目を逸らす事が出来ない。

一歩、また一歩と近付いてきて、手を伸ばせば届くところで立ち止まる。

何もいわず見つめられるだけで、私も何も言えずにじっとその瞳を見据える。

とびつきの王族で、私とは生まれも育ちも何もかも違う人。

彼のどこに惹かれるのか。

どうして彼がいいのか。

決して実らない恋だと知っているのに、私はきつと何度出会って

もこの人に恋をするんだろう。

王族としての威厳に満ちた態度にも、全くその出自を感じさせない態度の時にも。

二つに分かれてしまった石が、もう一度一つになりたいと願っているかのように、惹かれる気持ちはきつとこの先も変わらないんだろう。

あの日、村で出会ってしまったから。

あの時、誰よりも頼りにしてしまったから。

もうあの瞬間を無かった事には出来ないから。

成長して戻って来いといったその言葉を抛り所に、今まで巫女として頑張ってきたのだから。

この人がいなかったから、私は巫女になっていなかったのだから。あなたこそ、今の私を作り出した人。

「サーシャ。そんなに祭宮がいいの？」

ウイズの口から漏れた声はレッツの声。

その声には、ありとあらゆる感情が混じりあっているようで、何一つ感情が無いみたいに聞こえた。

レッツの声に心臓がドキンと大きく跳ね、全身に震えが走る。

「これはキミの心が見せる幻。一番キミの好きな人の姿が見えるだろう」

そういうとウイズが大きく手を広げる。

絶句して、レッツなんだかウイズなんだかわからない、目の前にいる人を見返す。

姿はウイズ。けれどもその声はレッツ。

「こんな風に祭宮にされたいの？」

ウイズなのにレッツの声と表情で、イタズラを企んでいる時のよう

に笑う。

その笑みに、ぞくつと背筋が寒くなる。

ウィズの腕がすつと体に回されて、ぐつと抱きしめられる。

それがひどく現実感が無くて、背中に回された腕が冷たくて、ますます体の震えが酷くなる。

「怖がらないでよ。別に、何もしないよ」

クスクスつとレッツが笑う。

これはレッツなんだと、レッツが何らかの力を使って起こした幻なんだと、そのレッツの笑い声ではつきりと認識した。

レッツ。

抱きしめられたままで動く事すら出来ないでいると、耳元でレッツが囁く。

「ごめんね、サーシャ。キミの大好きなヤツじゃなくなつて」

楽しそうに告げる言葉に悪寒が走る。

心の中で警報が大きな音を立てて鳴り出す。

何でだか、わからない。

でもこのままじゃいけない。

心の多くのどこか、本能に近い場所がダメだダメだと叫んでいる。それなのに、金縛りにあつたかのように体はびくりとも動かない。

何かが狂う。

このままじゃ何かが壊れてしまう。

「もつと甘い夢が見たかったかなー。あはははははっ」

面白いわけではないのに笑っているのだと、その笑い声から伝わってくる。

「何で王族なんだ。いつもあいつらはボクの大切なものを奪い取る」
呟く声からは、明らかに憤りが伝わってくる。

「あんなヤツを見ないでよ。ボクを見てよ」

「レッツ」

ぐつと、体に回された腕に力が籠められる。

痛い。

痛くて体を擦ろうとしても、レツの力が強くて動く事が出来ない。「こうすればキミに触れられるのに。ホントのボクはサーシャに触れることすら出来ない。今こうやって触れている感じがあるのに。なのに、ボクはキミの頬に触れることすら出来ないんだ」

さらに強い力で抱きしめられたかと想うと、すっと力が抜け、目の前にはレツが座り込んでいる。

しゃがんでその手に触れようと手を伸ばしても、手の影を素通りするだけで冷たい床の感触が手のひらに広がっていく。

レツの腕と私の腕が、一つに溶けあうように重なっている。触れたくて触れられない。

顔を上げようとせず、レツがポツリと呟く。

「ボクだけを見てよ」

ぱつと、レツが勢いよく顔を上げる。

「ここにいて間だけでいいから、ボクだけを好きになって！ サーシャを選んだのはボクだよ。祭宮なんかじゃない、ボクが選んだんだ！」

「……私、レツのこと好きだよ」

「知ってるさ！ 弟みたいに、小さい子を想うみたいに好きなんだろう。そんな好きは欲しくない。そうじゃない。祭宮みたいにボクのことを好きになってよ！」

レツの瞳が光を弾く水面のように輝いている。

水面からは水が今にも溢れ出しそう。

「ボクだってサーシャにあんな風に想われないよ。愛なんていらない。狂ってしまうほどの恋をボクにちょうだい！」

「……レツ」

何もいえなかった。

レッツが言つたとおり、一人っ子の私に出来た初めての弟のような気持ちで、レッツに接していたから。

「ボクを見てくれないなら、サーシャなんてもういらない！」

レッツの絶叫が奥殿に響き、反響する。

深い泉の色の瞳からは、こんこんと涙が湧き出してくる。

その涙の一滴が、重ねた手のひらに零れ落ちてくる。

触れることが出来ない涙の落ちた場所が、ほんのりと暖かいような気がする。

その暖かさが、レッツの心そのもののような気がして哀しくなる。

溢れる涙をそのままにして、子供みたいに泣きじゃくる。

その姿を可愛いと思うし、守ってあげなきゃって思う。

それと同時に、この小さい「モノ」にいらないと言われた事がとても不安になって、どうしようもない気持ちでいっぱいになる。

レッツに二度と会えなくなることが、何故かものすごく怖くてしょうがない。

どうか、そばにいらさせて。

いららないなんて言わないで。

「私、祭宮のことはもういいんだ」

レッツの顔から目を逸らし、出来る限りあっけらかんと装う。

絶対にレッツから離れたくない。

レッツともう離せなくなるのも嫌。

それに、もう忘れるって自分で決めたんだもの。

「嘘だ」

真っ赤な鼻をすすりながら、レッツが抗議する。

「本当だよ。だって祭宮は私以外の人を想っているもの。それに身分だって違いすぎる。こんな恋は不毛でしょ？」

「……祭宮が、なんだって？」

レッツの問いかけには答えない。

ウィズが想うあの人のことをレッツにいう気は無かったし、その人のことを口に出すのすら嫌だったから。

「だからってわけじゃないけれど、ちゃんとレッツのこと見るよ」

「ふーん」

不満げに含みのある顔で、レッツが何かを考えるような仕草をする。

「もう弟みたいに思ったりしない。ちゃんとレッツのことを一人の人としてみるよ。って、レッツは人じゃないか」

クスクスッとレッツが笑う。

「約束する？」

「うん。約束する。その印にこれをあげる」

首に手を回し、細い鎖でつないであった青い石を取り、レッツの前に置く。

レッツは不満そうな顔で石を一瞥する。

「こんなのいらない。呪いがかかる」

「呪いなんてないよ」

「じゃあ怨念」

「え？」

きつと何も言わなくても、この石の由来をレッツは知っているんだろう。だから余計に苦虫をつぶしたような顔をするんだ。

「とにかくいらない。サーシャがいらなら、泉にでも捨てとけば」

まるで興味なしといった顔で立ち上がり、鎖を持ち上げて私の目の前に石をぶら下げる。

レッツは本当にイヤイヤ、まるで汚いものを触るかのように指先でつまんで、石を見ないように顔を逸らす。

鎖を受け取り、とりあえずそれと服の袂にしまう。

何も言わずに立ってどこかを見ているレッツの横顔を見上げると、やはりその姿は少年のようにしか見えない。

レッツときちんと向き合う事が、とてもとても難しい事のように思

えてくる。

姿かたちで恋をするっていう訳じゃないけれど、でも目から入ってくる情報が恋愛対象外だと、ありありと伝えている。

そのうち、何とかなるかな。

目に見えることがこんなにも厄介だなんて。

いつそ姿が見えなければいいのかな。

ううん、でもそれはそれで寂しいし。

本質、と以前レツが言っていた。

私が見ている姿は、水竜の本質だって。

ということは、その姿は当面変わらないって事よね。

全部ひっくるめてレツってことなんだから、姿がどうだとかって言っているうちは、まだまだってことね。

溜息をついて顔を上げると、レツがにっこりと笑う。

その笑みにつられて、レツに笑い返す。

それだけで、レツが嬉しそうに頬を緩める。

そんなちよつとの事が、くすぐったいような甘ったるいような、心が満たされていくような感じがした。

「ねえ、レツ。ここですつと二人でいられたら、幸せになれるのかな」

「何でそんな風に思うの」

「何となく」

上手く理由は言葉に出来ないけれど、レツという時、すごく穏やかな気持ちになれる。

それは初めて出会った時から変わらない。

だから、ずーつとずっと誰にも邪魔されずに一緒にいられたら、きつととても満たされた気持ちになれる。

奥殿で二人つきり。

何もしなくてもいい。

ただ陽だまりの中で二人でいらればそれでいい。

それに今は誰にも会いたくない。

前殿に戻ってシレルの顔を見たら、全部また思い出す。

醜い私の心の中。

どうしようもない行き場のない気持ち。

そういうものを今は何も見たくない。ここにいれば、そんな汚いものと離れていられる。

「さあね。幸せになれるかどうかはしらないけれど、サーシャのしたいようにすればいいよ。……今は、ね」

変わらない笑みを浮かべたままレツが告げる。

けれど、その瞳は遙か遠くを見ているようにも見えた。

天窓から入る光が淡く薄くなり、奥殿の中を朱色に照らしている。夜は奥殿に入ってはダメだよ。

巫女になった最初の日、レツにそう教えられた。

一度だけ例外で水竜の大祭の時に入れてもらったけれど。

入っちゃいけない理由はよくわからなければ、水竜たるレツが言うんだから、それは絶対。

背中合わせにして座っているレツのほうを振り返る。

何をしているんだろうと思っただけ覗き見てみると、熱心に手紙を書いている。

ここ最近、レツのところに頻繁に手紙が届く。

その手紙が届くと嬉しそうな顔をしたり、少し難しい顔をしたりして空を見上げる。

誰を見ているんだろう。

誰からの手紙なんだろう。

ずっと気になっているけれど、聞く事が出来ないでいた。聞いちやいけない気がして。

ただ何となくわかるのは、昔巫女だった人とやり取りしているんだろっていうこと。

私が巫女じゃなくなった後、レツはこんな風に手紙を書いてくれると約束した。

声が聴こえなくなった後、私たちを繋ぐもの。

昔巫女だった人と遣り取りしているんだとしても、私にはそれを邪魔する権利は無い気がする。だから、レツがしたいようにしているのを見守るしかない。

「暗くなってきたから、目が悪くなるよ」

「別に、目が悪くなったって何も困らないもん」

そうですか。

そうかもしれないけれど。

そう言われると返す言葉が無い。

この人でない「モノ」の事を理解しようと思っても、なかなか自分の常識では計れないところがあって、こういう時に困ってしまう。かといって、全く別の生き物として扱われるのも厭う。

「ねえ、そろそろ暗くなってきたから帰るよ」

「ふーん。お疲れ様」

ついさっき熱烈告白をしたかと思えば、このクールさ。

レツという人……なのか？……は本当につかみどころが無い。

こういう態度を見ると、さして私に執着しているようでもない気がするんだけどなあ。

なんか肩透かしを食らっているみたいじゃないの。

もしかして、祭宮なんかよりも何倍もタチの悪い男なんじゃないかしら。

こうやってヤキモキさせられるのは、レツの作戦だったり。

それに引っかかっているのかしら、私。

あーもうっ。見た目はチビっ子なのに、中身は真逆って言うていくらい大人なんだもんなあ。

それでいて甘えた口調に甘えた態度。

これが全部計算ずくなら、真の女つたらしになれるわね。

私の周りには口クな男がいないわ。

全くこっちの様子を気にしないレツに、聞こえよがしに溜息をついて立ち上がる。

深く考えたってしょうがない。

月が昇る前に奥殿を出なきゃ。

「じゃあね、また明日」

今まで幾度となく口にした言葉をレツの背に落とし、振り返りもしないレツに多少の腹立たしさを感じながらも背を向ける。

「本当に帰るの？」

あと数歩で奥殿を出る。というところまできたところで、背後から声を掛けられる。

振り返るとレッツの姿は、ほとんど闇に溶けてしまっていて、よく見えない。

「帰るよ。だって夜は奥殿にいちやいけないんでしょ」

本当に帰るのなんて聞くなんて、白々しい。

いまさらちよつと冷たくしたかな、なんて後悔したって遅いんだから。

別に怒ってなんかないもん。

なのに、ほんのちよつと声が冷たくなる。

「最初にそう言ったのレッツじゃない」

陽が落ちる前にここを出るのはお約束。

「そうだけどさー。もうちよつといなよ、ここに」

駄々をこねるみたいに語尾を伸ばす。

そういうところが子供っぽいんだってば。

「やだよ。だってレッツはどうせ手紙書いているだけでしょ」

「妬いてるの？」

嬉しそうに聞かないでよ、もう。

「妬いてないです。事実をありのままに述べただけです」

なんでニヤニヤ笑うかな。

別にレッツが誰に手紙を書くこと、かつて巫女だった人たちとどんな事を遣り取りしてようと、私には関係ないし。

努めて冷静な口調でレッツに言い返した。

加えてなるべく無表情で。

「ちえっちえっちえー！。つまんないのー」

パサッと遠くで紙が散るような音がする。

「ねえ、帰らないでよ。ボクの傍にいてよ」

足音はしないけれど、徐々に大きくなる声が、レッツが近付いてく

ることを表している。

高鳴るな、心臓。

冷静よ、冷静さが大事なのよ。

「何で？」

「何でって、一緒にいたいから」

嬉しそうな顔なんて、しないんだから。でも頬が緩みそう。

「でも夜はここにはいられないよ」

「ボクが良いって言うてるんだから、いいんだよ」

にっこりとレッツが笑って手を差し伸べる。

その手を取りたいけど、でもあつさりレッツの言葉に乗ったら悔しいし。

どうしようか悩んでいると、背後で扉が閉まる音がして、奥殿の中がよりいっそう暗くなる。

「ほづら、もう帰れない。今日は一晩中ボクに付き合ってもらうよ」
くすくすという笑い声を上げ、レッツは満足そうな顔をする。

そのレッツの笑みに、しょうがないから付き合ってあげるわって顔をして応え、レッツの手に手を重ねる。

「さあ、ホントのボクに会わせてあげるよ、サーシャ」

その声が酷く耳障りで、重たいような低いような、軽いような高いような、どこか薄気味悪くて、レッツの声じゃないような気がした。

「おいで」

決して繋ぐ事の出来ない手に握られている感触がして、ぐいっと奥殿の奥のほうへと引っぱられる。

カッン、カッンと私の歩く音だけが響いて、他は全て夜の闇に吸い取られてしまったみたい。

天窓からは、もうごく僅かな光しか入ってこない。

入り口の扉も閉められてしまって、奥殿の中を暗闇が支配し始め

ている。

怖いとか、寒いとか、何ともいえない負の感情がわきあがってくる。

それは本能的に感じる恐怖感だと思う。

夜が怖い。

暗いところが怖いっていう。

でもそれだけじゃ無い気がして、何となくレツに対しての恐怖感のような気がして、体の底からくる震えがレツに伝わらないように、と歯を食いしばる。

何となく、今感じている事がレツに伝わったら傷つけてしまうような気がするから。

レツに悲しい顔をさせたくない、と震えがくる場所と同じところから湧き上がってくる。

レツに対する感情は複雑で、多分自分ではどうしようもない部分でレツを畏れ、それと同時にレツに畏敬の念のような、愛情のような感情を抱いている。

多分それは「水竜」という紙に対するもの。

それとは別にレツという私の知っている人の姿をしているモノに対しても、複雑な色々な感情がある。

だけど、それがどこまでが水竜に対するもので、どこからがレツに対してのものなのか、私にはさっぱり区別をつけることが出来なくて、言いようなない感情が胸の中に渦巻いている。

だから、レツが望むように好きになれるかっていうと、やっぱりものすごくハードルが高い気がする。

本能的な恐怖を乗り越えるのは難しい気がして。

なかなか大変だなんて、目には見えるけれど触れることが出来ない手に掴まれながら思う。

見下ろせるほど低いところにある華奢な肩が、近くにあるのにもものすごく遠い存在のように改めて感じた。

レツは奥殿の入り口から一番遠いところにある、開かない扉の前で立ち止まる。

昼間に何度か見えているけれど、誰が通るのか、誰が開けられるのか見当もつかない大きな扉で、上辺は天井まで続いていた。

取っ手らしき物も、かなり高い位置にあり、遠目から見た感じでは人くらいの大きさはありそうに見えた。

「ここにホントのレツがいるの？」

この巨大な扉の向こうに「ホントのボク」がいるのかと思って聞くと、無言でレツは振り返りもせず扉の上の方を指差す。

そこにレツがいるのだろうか。

昼間に見たときには特別何かがあるようには思えなかったけれど、指差す方向を凝視して、必死に姿を探してみるけれど、暗くて扉にどんな装飾がされているのかすら、よくわからない。

ましてレツの姿なんて見つけれない。

それに、私は本当に水竜の姿がどんなものなのか知らない。

漠然と見ればわかるのになって思っていたけれど。

「暗くてよくわからないよ」

その言葉にレツが振り返る。

何故かその瞳が空虚で、まるで魂の入っていない人形みたいに見える。

ガラス球のような瞳が天窓から入ってくる僅かな光を、キラキラと映して反射している。

再びレツが顔を扉の方に向け、掴まれている手をぐっと強く握られる。

掴まれた手に目を移し、レツの手を握り返すようにすると、ゆっくりとその姿が光にまぎれていく。

何で突然明るくなったんだろうと思って顔を上げると、開かないはずの扉が開いている。

うつん、正確には無くなっている。

扉があつた場所からは月明かりが入ってきて、湖面と木々の緑が視界に飛び込んでくる。

奥殿の裏側？

私の知識の範囲内での推測にしかすぎないけれど、湖の中央に浮かぶ小島に奥殿は立てられているのだから、湖面は小島を取り巻く湖で、その先の木々は奥殿を周囲から覆い隠すようにある深い木立なんだろうと思う。

夜だから見えないけれど、きっと木立の先には、万年雪を被った険しい山々が連なっているはず。

小島を一周したりした事が無かったので、初めて見る景色に言葉を失った。

人間が誰も立ち入る事が出来ない、自然の中の神の領域。

全て是水竜を守る為に存在する、森、山、湖。

その中にまるで自分が招かれたようで、心が高鳴る。

見上げれば月は煌々と灯りをともし、星はまるで降ってくるのではないかと思うほど、空は沢山の輝きで埋め尽くされている。

こんな美しい風景は見たことが無い。

どこにでもあるような景色なのに、こんなにも清涼な場所はきつとここにしかない。

心地よい静寂の中で、その風景に酔いしれていた。

「気に入った？」

手を握り横に立つレッツが静かに問いかける。

「これが本当のレッツなの？」

この風景がレッツそのものなのかと思い、聞き返す。

横にいるレッツの瞳は、いつも以上に生氣に溢れている気がする。

ずっとレッツの手が離れ、レッツが目の前を駆けてゆく。

地面が無くなった後も、当たり前のように湖面の上を走ってゆく。ぴたりと止まって振り返り、大きく手を横に広げ満足そうな笑み

を浮かべる。

「そうだよ。この全部がボクなんだよ。水も木も空も、みんなボクのものなんだ」

「じゃあ本当のレッツは目に見えない、空気みたいな存在なの？ 本当はどこにだて自由にいけるの？」

「ううん、違うよ。ボクはね、永遠にこの神殿から出られないんだ」
笑みが消えたけれど、その声のトーンは変わらず楽しげな感じがする。

今こうやって外に出ていることが楽しいんだろうか。

出られないという言葉とは裏腹は明るさに、真意を掴みかねる。

レッツの体が、どこからか湧き上がってきた小さな水の粒に覆われて、月明かりの下、青白く光り輝いている。

なぜか、彼の存在を喜ぶ沢山の歌うような幻聴が聴こえてくる。

こんなにも特別なモノなのに。

こんなにも世界は彼を祝福しているのに。

なのにどうして、その瞳は哀しげなんだろう。

月明かりに照らされて湖面に佇む姿はとても神秘的で、今まで見たどんなレッツよりも輝いて見えるけれど、瞳だけは深く暗い海の底に落ちてしまったみたいに、物憂げな表情を浮かべている。

「どうして。レッツは何だつて出来るのに、どうしてここから出られないの」

ゆつくりと島の端の方へ、レッツの方へと歩みを進めて近付いていくと、レッツが両腕を真っ直ぐに掲げる。

「見える？」

「何が？」

「ボクを縛る忌々しいもの」

腕に何かがついているんだろうけれど見えなくて、湖に落ちるギリギリのところになって、レッツの伸ばした腕を見る。

別に、いつもと変わらない気がする。

特段変わった様子もないし、目を凝らしても腕に何かがついているようにも見えない。

ただ、キラキラと体を覆う水の粒が、レツの全身を覆っているようには見えるけれど。

多分それは、レツの言っている忌々しいものなんかじゃないんだろう。

ならば縛り付けているものは何なんだろう。

瞬きをして、湖に落ちないように気を配りながら、もう一度レツのほつを見やる。

細い、薄い、金の色。

その金の糸と銀の糸が複雑に編みこんで模様を作って、月明かりを反射している。

どこから繋がっているのか判らないけれど、レツの両腕にくるくと巻き付いている。

禍々しい感じもないし、嫌な感じも受けない。

むしろ大切に、レツを守るように腕だけじゃなくて体全体に絡み付いている。

でもこれがレツの自由を奪っているそのものに違いない。

「どうして……」

きつと悪意や敵意じゃない。むしろ全然それとは逆の想いが籠められているようにすら思えるのに。

なのにどうしてこんなにレツは哀しげな顔をするの。

レツは両腕を目の前に持ち上げ、それからだらりとその腕を垂らす。まるでやつと重たい荷物を下ろせた、と言わんばかりに。

しばらくして大きく溜息をついて、今度は湖面にしゃがみ込んで頭を抱えてしまう。

「サーシャにも、はずせそうにないか」

湖面に波紋が広がる。

ポツリ、ポツリと小さな波紋が、あとからあとから浮かび上がっ

てくる。

「ボクはいつになったら自由になれるんだろう」

嘆き悲しむ声に呼応して、レツのまわりの水滴たちが小さく動き出す。

小さな粒は大きな塊になって、顔を覆うレツの手の周りに集まり、その手を揺さぶるように動く。

まるでレツを慰めようとしているみたいに。

水に意思があるなんておかしいけれど、でもそんな風に見えた。

レツは顔を覆う手をほんの少し下げ、手の周りを囲む水滴を見て微笑んだ。

その姿に胸がぎゅっと掴まれて、息苦しさを覚えるほど切なくなつた。

聴こえなかったけれど、その口が何かを呟いて動いたような気がした。

ゆっくりとした動作でレツが立ち上がった時、その顔には涙の跡なんて無くて、いつものレツだった。

さつき湖に落とした波紋はなんだったんだろう。

てつきりレツが泣いていたのかと思つたのに。

レツは小首を傾げてニコッと笑う。

「中に戻ろつか。夜露に濡れて風邪をひくといけない」

スタスタと歩いて目の前で止まり、奥殿の中を指差す。

こことは対照的に、奥殿の中は真っ暗で、中に入るのを躊躇う。

こっちの方が、居心地がいいのに。

そう思つてレツを見ても、有無を言わせない笑顔を浮かべている。こういうときは何を言つたって引かないのは判っている。

「うん。わかった」

歩き出したレツの後ろを、遅れないようについていく。

途中で後ろを振り返りたい気持ちが悪くて、立ち止まって振り返ると、何故かさつきまでの美しさは消え去ってしまっているよ

うに思えた。

全く同じ風景なのに、冷たい氷で描かれた絵みたいで生気が無く、青白い月も突き放すような冷たさで佇んでいた。

奥殿に入り目が慣れるまでの間、目の前のレツの輪郭すら希薄で、一瞬自分がどこにいるのか、どこが上でどこが下なのかわからなくなる。

背後でカチャリという鍵の閉まるような音がして、心臓が口から出るんじゃないかって位、びっくりする。

ビクッと体が動いたのをレツが気配で察したのか、クスクスという笑い声が聞こえてくる。

「ボクがいるよ。怖くない」

ボッと篝火がつく音がして、奥殿の中が赤い光でほのかに明るくなる。

レツの姿は無い。

首を左右に回し、目を凝らしてレツの姿を探すけれど、レツの姿は見つからない。

そのかわり、目の前に巨大な黒い大きな塊があるのが見える。

こんなの、さっきまでは無かったのに。

よくよく周りを見ると、見慣れた奥殿じゃない。

光を取り入れる為の天窓が無い。

装飾を施した、白い石壁も無い。

そびえ立つ、いくつもの太い柱も無い。

確かに奥殿の中に入ったはずなのに、ここは奥殿じゃない。

光を取り入れる場所はどこにも無くて、黒っぽい土壁に囲まれていて、まるで洞窟の中に迷い込んだみたい。

目の前の黒い塊は、よく見ると鎖のようなもので繋がれている。けれどあまりに巨大で、それに暗くって、それが何なのかは全然わからない。

ただの黒い石、ではなさそう。
でも不思議と怖くは無い。

「ボクはボクを縛り付けたヤツを許さない」
静かな声が洞窟の中に溶けていく。

声がするほうを見ると、すぐ右横にレツが立っている。

「ここはどこなの」

「奥殿。本当の奥殿。いつも見ているところのずっとずっと奥のほう」

顔色も表情も変えず、レツは淡々としている。

深い闇。

決して光の届かないところ。

それこそがレツの心の内そのもののようで、心の中の孤独を表しているような気がする。

「ボクを好きになって、ここから出して」

「レツ」

「ボクの本質を見抜いたサーシャなら、この呪縛を解く力があるかもしれない。だから好きになって」

言っている意味がわからなくて、レツの顔を何も言わずに見返すと、ふっとレツが苦笑する。

「サーシャがボクを好きになってくれたら、ボクのこと触れるようになるかもしれない。そしたら、この呪縛からも逃れられるようになるかもしれないでしょ」

好きになることと、レツの呪縛が解けることがどうして繋がるんだろう。

それとこれとは、全然別の問題のような気がするのに。

私の知っているどんな物語にも、水竜が意図的に閉じ込められたなんて書いていなかった。

だから、どうすれば水竜が自由になるかなんて、私は知らない。
好きになって、触れるようになれば、本当に鎖から解いてあげら

れるのかな。

初めて知る事柄に言葉を失っていると、笑みを消し、レツがよく通る静かな声で話し出す。

「目の前に見えるでしょ。これが本当のボクだよ」

黒い塊を指差す横顔は無表情。

そのレツの顔と、目の前の巨大な「モノ」を見比べる。

何故か恐怖は無い。

怖いとかっていうよりも、心のどこかで納得している。やっぱりレツは人じゃない存在なんだって。

そんな人知を超越した存在であるレツを縛り付けているのは、闇の中でも光を放つかのように輝いている鎖。

とても人の出来ることじゃない。

こんなところに水竜を閉じ込め、鎖で繋ぎとめ幽閉するなんて。

それに、水竜も鎖も人の手で扱えるような大きさじゃない。

何でこんな事をしたの。

どうしてレツを闇に閉じ込めなきゃいけなかったの。

こんな光も風も届かない場所に。

体が憤りで震える。

「誰がこんな事を」

「始まりの巫女」

さらっと、事も無げにレツが応える。

「……どうして」

信じられない。

だって、御伽噺や吟遊詩人たちの話の中、それに神殿に残る書物の中でも、二人は互いに惹かれあい慈しみあっていたって描かれていたのに。

レツの横顔には一点の曇りも無い。

本当の自分を見据え、その瞳はたじろがない。

そうなるまで、こうやって言い切れるようになるまでに、一体どれだけの絶望があったのだろうか。どれほどの涙を流したのだろうか。どれくらいの時があったのだろうか。

でもきつと時間はレツの心を癒していない。

「初代国王と始まりの巫女が二人でボクをここに縛り付けた。目に見える鎖は初代国王のもの。目に見えぬ呪縛は始まりの巫女のもの。彼女よりも力のある巫女じゃなきゃ、この呪縛は解けない」

一呼吸置いて、レツがゆっくりと私を見る。

「ボクの本質を見抜いたサーシャなら、始まりの巫女みたいにボクを具現化させることが出来るかもしれない。キミに出会った時よりキミが名前を付けてくれた時、ボクの輪郭は色濃くなった。サーシャがボクに愛情をくれることに、きつとボクは少しづつはつきりとした存在に近付いていく。だから、ボクを好きになつて。ボクを助けて」

本当は、涙なんて遙か昔に枯れ果ててしまったのかもしれない。

言葉には昼間のような激しい感情は無い。

レツの言葉には絶望と、そして切実なまでの願いが混在している。私がその手を取れたら。

レツの望むように具現化してレツに触れられるようになれば。横に立つレツの、決して握ることの出来ない手を、私はずっと探し続ける。

言葉じゃなくて、体温を伝えたかったから。

たった一人、その温もりが欲しかったから。

温もりさえ感じられれば、きつと何もかも上手くいくような気がしたから。

本当は、永遠に手に入れることは出来ないと知っていたのに。

この巨大な鎖と、目に見えない金と銀の糸。

それを紡ぎだした始まりの巫女の「巫女としての能力」はとても

私には超えられない。

わかってしまった。

レツの全てを諦めたような表情で。

さつき湖面を揺らした波紋で。

あの時レツには判ったんだろ。私には到底無理だという事が。

それでも、もしかしたらという願いを捨てきれないレツの気持ちが痛いほどにわかる。

奇跡に縋りつきたいほどの思い。

信じていた人に裏切られ、光の届かない場所に閉じ込められ、ずっとずっと巫女を探し続けているレツ。

こんな風に追い詰めた始まりの巫女と初代国王を、私は許せない。それなのに、今なお水竜を利用しようとし続ける王族たちが腹立たしい。

なのに、真綿で首を絞めるようにレツの全身を覆っている気配は、誰にも触れさせないという始まりの巫女の強い執着のよう。

そんなに好きだったのに、どうして。

レツもあなたを好きだったから信じていたのに、何でこんな事を。

私は、今はもう存在しない人に問いかける。答えは返ってくるはずも無いのに。

ただ、さつき見た金と銀の糸が脳裏によぎる。

光輝くレツにまわりつき、決して離れない偏愛。

そこに至るまでには色々な何かがあったのかもしれないけれど、私には到底理解する事は出来ない。

許す事も出来ない。

手に触れることが出来ない「本質」のレツを離れ、一步一步黒い塊に近付く。

本当のレツ。

手を伸ばしてみると、暖かな温もりが伝わってくる。

触れないはずのレッツに触れる。

どういうこと？

振り返りレッツの顔を見ると、泣き笑いのような顔をする。

「それ、は触れるんだ。誰にでも。でも気持ち悪がって誰も触ろうとはしない。怖くない？」

「怖くないよ」

膝き、両手で触れ、ゆっくりと頬を寄せる。

「はじめまして。ずっと寂しかったんだね。私が傍にいるよ。レッツ」
切なくて、涙が嗚咽になる。

こんなにも暖かいのに。こうやって触れることが出来るのに。

私はレッツの願いをかなえてあげる事は出来ない。

上手く言葉にならないけれど、でも伝えたかった、人ならざるものに。

どうか、少しでもレッツの心が癒されますように。

どうかレッツの永遠に続く孤独が少しでも軽くなりますように。

奇跡が起きて、私がレッツの呪縛を解ける日がきますように。

祈りの言葉を心で唱え、本当のレッツにもたれかかり、その温もりを感じながらゆっくりと目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3558s/>

MY SWEET DARLIN' 孤独の生まれたところ

2011年4月9日21時40分発行